

2013 年度 日本トランスパーソナル心理学・精神医学会 第 14 回学術大会プログラム

トランスパーソナル心理学の源流における東西の交流

第 14 回目をむかえる学術大会を開催できますことを、まことにうれしく思います。今回は、古都京都にふさわしく、トランスパーソナル心理学の源流にさかのぼり、東西交流の原点となるものを、基調講演の先生方にお話ししていただきます。また、原点にさかのぼるとともに、今後学会のコアになっていくと思われる分科会活動について、提案と議論が 2 日目におこなわれます。紅葉の京都で、みなさまのお越しをお待ちしています。

第 14 回学術大会実行委員長 中川吉晴 (同志社大学)

◆日時 11 月 2 日(土) 13:00~20:30 基調講演、ミニワークショップ、懇親会

11 月 3 日(日) 9:30~16:30 研究発表、総会、特別講演、分科会

◆会場 同志社大学(京都市上京区、今出川キャンパス、御所北側) 良心館

- 大会当日の受付は、良心館 1 階 104 号教室前でおこないます。事前申し込みがなくても当日参加もできます。良心館は、今出川キャンパス内の北西部に位置する大きな建物です。良心館 1 階 104 号教室と 4 階の教室を使用します。
- JR 京都駅から来られる方は、京都駅から市営地下鉄 (国際会館方面) に乗り換え、今出川駅で下車 (乗車時間 10 分程度)。良心館と今出川駅北側の改札口とは地下連絡通路でつながっています。今出川駅の無人北改札口を出て、右手側の同志社大学への入口からお入り下さい。なお日曜日はこの通路は閉鎖されています。良心館前の門あるいは西門からお入りください。詳細は大学のホームページから「キャンパス紹介・交通アクセス」の項目をごらんください。

.....

大会スケジュール

11 月 2 日 (土) 学術大会 1 日目(良心館)

12 時 00 分 理事会 良心館 1 階 RY101 教室

12 時 30 分 受付開始 良心館 1 階 RY104 号教室前

13 時 30 分 開会 学会長挨拶 良心館 1 階 RY104 号教室

13 時 40 分 基調講演 良心館 1 階 RY104 号教室

- 浅井雅志先生 京都橘大学 「トランスパーソナル心理学の一源泉としてのグルジェフ」
- 吉永進一先生 舞鶴工業高等専門学校 「民間精神療法に見る東と西」

15時40分 終了

16時00分 ミニワークショップ

- おとだまセラピー 良心館4階 RY401号教室
- G. I. グルジェフの思想と実践 良心館1階 RY104号教室
- 座禅 良心館4階 RY429号教室

18時00分 ミニワークショップ終了

18時30分 懇親会 会費4500円 会場 寒梅館1階カフェレストラン Hamac de Paradis(アマール・ド・パラディ) TEL:075-251-0880 道路を隔てて良心館の向かい側の建物です。

20時30分 終了

- 会員ラウンジは、1階 RY101号教室をご利用ください。

11月3日(日) 学術大会 2日目(良心館)

研究発表 9時30分-11時30分 (良心館内4階の2会場を使用します)

発表は各30分 発表要旨は8ページ以降に掲載しています。

発表者控室・会員ラウンジ 4階 RY415号教室

【会場1 良心館4階 RY416号教室】 司会 林信弘先生 立命館大学

1) 9時30分-10時00分

神秘体験のコスモロジー的な意味

塩田洋子(カリフォルニア統合研究大学院哲学と宗教学科)

2) 10時00分-10時30分

現代の生殖医療現場が抱えるジレンマ—チーム医療を基盤としたメンタルケアの提案

竹重幸(名古屋大学大学院環境学研究科)

3) 10時30分-11時00分

日本古層の生命観とその現代的意義—縄文土器文様の分析と意味解釈から

呉清恵(大阪経済法科大学アジア研究所)

【会場2 良心館4階 RY417号教室】 司会 村川治彦先生 関西大学

1) 9時30分-10時00分

気功における内的プロセスとその循環構造—気功テキストのナラティブ分析を通じて

蒲生諒太(京都大学大学院教育学研究科)

2) 10時00分-10時30分

イスラエルにおける「平和の文化」の構築—マインドフルネスの実践による市民社会からの意識改革

吉村季利子(大阪大学国際公共政策研究科)

3) 10時30分-11時00分

精神の力(la force spirituelle)とつくることの意義

山田良憲(立命館大学大学院文学研究科研究生)

4) 11時00分-11時30分

魔境について―「西遊記」の構造にふれて

塚崎直樹(つかさき医院)

11時30分 昼食 寒梅館1階カフェ、および大学周辺を、各自でご利用ください。

12時45分 総会 良心館1階 RY104号教室

13時00分 特別講演 良心館1階 RY104号教室

● 林信弘先生 立命館大学「これからのトランスパーソナル心理学に求められるもの」

13時30分 分科会 良心館1階 RY104号教室

16時30分 終了

.....

大会参加費・申し込み方法

学術・一般会員 4000円 (当日 5000円)

学生会員 2000円 (当日 3000円)

非会員 5000円 (当日 6000円)

非会員学生 3000円 (当日 4000円)

懇親会 一律 4500円

大会参加を希望される方は、下記まで、所属、氏名、会員資格の有無、懇親会参加の有無を記載のうえ、メールにて申し込んでください。学生の方は、所属のところに学生と入れてください。あわせて参加費の振込をお願いします。

大会事務局 jatp2013@gmail.com

参加費の支払いは銀行(三井住友)か郵便振替をご利用ください。事務作業の都合上、可能なかぎり銀行をご利用ください。なお、これらは学術大会専用の口座です。年会費の口座とは異なりますので、ご注意ください。お手数ですが、年会費に関しては学会口座にお振込みください。

○三井住友銀行へお振り込みされる場合

■円町支店(えんまちしてん) 店番491

■口座番号 普通預金 7087387

■口座名義 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会

○郵便振替口座を利用する場合

■口座番号 00910-0-170794

■口座名義 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会

大会直前に郵便振替で払い込みをされた方は、恐れ入りますが確認のため払込み証をご持参ください。

11月2日 基調講演 13時40分

良心館1階 RY104号 司会 村川治彦先生 関西大学

トランスパーソナル心理学の源泉としてのグルジェフ

浅井雅志先生 京都橘大学

トランスパーソナル心理学は perennial philosophy の最も新しい表出形態という表現も可能だと思うが、その意味で、その源泉はるか昔まで遡れる。その誕生に大きな刺激を与えたのは近代オカルティズム、およびその影響を濃厚に受けたいわゆる「ニューエイジ」思想であるが、グルジェフは前者の中核を占め、また後者の大きな源泉となった。たしかにグルジェフ自身、自分が述べることは西洋思想のまったく知らないことだと明言しているので、トランスパーソナル心理学に限らず、ある学問分野の源泉に彼を位置づけるには注意が必要だ。しかし同時に、彼が1915年にロシアに現れたのは、自らの思想を広めるには、近現代において最も影響力の強い西洋思想にこれを紹介するのが最も効果的だと考えた結果であろう。彼の思想の土壌となっているのは、古代エジプト、ペルシア、インドの思想、あるいは仏教、キリスト教、イスラームなどの秘教的部分であり、彼がそれを学ぶために長年にわたって放浪した地域の広がりから見ても、彼が東西の神秘思想の結節点に在るのは間違いない。彼自身、古代の叡智の継承者を自認しており、彼を「永遠の哲学」の流れに位置づけることに無理はあるまい。それゆえ、彼をトランスパーソナル心理学の源泉と見ることは、この比較的新しい学問分野の誕生の経緯、および目指すところを知る上で有益であろう。しかし Wikipedia には以下のような記述が見られる。

Doctrines or ideas of many colorful personalities, who were or are spiritual teachers in the Western world, such as Gurdjieff or Alice Bailey, are often assimilated into the transpersonal psychology mainstream scene. This development is, generally, seen as detrimental to the aspiration of transpersonal psychologists to gain a firm and respectable academic status. (西洋世界の過去および現在の霊的な師である、グルジェフやアリス・ベイリーといったそうそうたる人たちの教義や思想が、トランスパーソナル心理学の主流にしばしば取り込まれている。こうした展開は一般に、トランスパーソナル心理学者がアカデミックな世界で尊敬される確固たる地位を得ようとする上で障害になると考えられている。)

この発表は、こうした見方に対する応答にもなるだろう。

浅井雅志先生：京都橘女子大学教授。同志社大学大学院修士課程、マンチェスター大学大学院博士課程修了、同大学より Ph.D. 所得。1975 年以来、グルジェフ思想に基づいた「ワーク」に関わり、イーデン・ウェストキョートを主宰する。著書『モダンの「おそれ」と「おののき」』松柏社、訳書に G. I. グルジェフ著『ベルゼバブの孫への話—人間の生に対する客観的かつ公平無私なる批判』『生は「私が存在し」て初めて真実となる』P. D. ウスペンスキー 著『奇蹟を求めて—グルジェフの神秘宇宙論』(いずれも平河出版社) 等多数。

民間精神療法に見る東と西

吉永進一先生 舞鶴工業高等専門学校

明治末から昭和のはじめにかけて、霊術や精神療法と呼ばれるさまざまな心身技法が流行している。精神療法とはいえ、必ずしも精神の治療を意味するわけではなく、治療者の精神力によって心身の病を癒すという意味であった。当時、術者の精神力は超常現象を起こし、遠隔地の病人を治療することもできるとさえ信じられていた。それらの精神療法は、心身の病を癒すだけではなく、精神修養、宇宙観、時には死後の靈魂さえも対象としており、それは宗教とも療法ともつかない領域であった。しかし、江戸以前の宗教状況から考えてみれば、宗教者と治病者の境界線は曖昧であり、治病者は患者のさまざまな愁訴に応じていた。社会が近代化されたとしても、人間の苦しみが分節されたわけではない。戦前の民間精神療法の曖昧さ、あやふやさは、人間の病自体は分節できないという原事実由来するのではないか。それを示すように、これは日本だけに限られたことではなく、同時期のアメリカにも同様の現象があり、マインドキュア、ニューソートと呼ばれる、さまざまな技法や思想があった。

日米の民間療法はどちらも催眠術を出発点として発展していったが、両者を比較すると、日本の精神療法の主流は静坐、呼吸など心身を用いるのに対して、アメリカではクリスチャン・サイエンスのように言葉を用いるものが多いという違いがある。その理由のひとつに、東洋に比べて西洋のキリスト教文化では身体技法が少なかったことがある。とはいえ、アメリカに心身技法がなかったわけではない。19世紀末以降、ヨガや仏教などが欧米に紹介されていくと、アメリカのニューソート実践者が仏教やヨガを吸収し、すぐにアメリカ産のヨガを発信しはじめている。アメリカ人 W・W・アトキンソンはヨギ・ラマチャラカと自称して、催眠術や神智学の枠組みを利用してヨガを再編集し、その呼吸法を宣伝した。彼の技法と体系は単純で整理されたものであったので、文字通り世界中に広まっている。日本でも彼の著書は翻訳紹介され、霊術の技法に取り入れられている。このように「東」と「西」は、一面では相互に影響しあい、重層的に近代の心身技法史を形づくってきた。この講演では、錯綜した影響関係をいくつかの事例を取り上げながら話してみたい。

吉永進一先生(1957-)：舞鶴高専准教授。京都大学文学部宗教学科大学院修了。神智学、近代仏教史、民間精神療法を研究。編著『日本人の身・心・霊』（クレス出版）、「太霊と国家」『人体科学』17巻1号など。科研報告書『近代日本における知識人宗教運動の言説空間』などは右の URL からダウンロード可能。

<http://www.maizuru-ct.ac.jp/human/yosinaga/>

11月2日 ミニワークショップ

1 おとだまセラピー 池田有加先生 良心館4階 RY401号教室

「おとだまセラピー」は、根源とのつながりをリアルに体験し、異次元レベルの目覚めと変容を起こす、存在にフォーカスした独自のセラピーです。木の光、月の光、人の光といった、あらゆるものの光を「声の音」にします。声はその人の存在を映し出す「響き」。その響きの味わいと交流、感覚や感性による体験は、知識で知る叡知とは少し違った叡智を実感させてくれるかもしれません。この2時間のワークショップでは、微細なものを捉える感性をアップさせ、声によって「いのち」に触れる旅を体験して頂きたいと思います。

講師：池田有加先生（2013年6月に荒川有加から改姓）

おとだまのつかい主催。音楽療法士として臨床歴15年。立命館大学大学院応用人間科学研究科修了。修士論文「気の音楽療法—『莊子』から読み解く一人称の実践—」で昏睡状態のクライアントと辿った音楽療法の道程をまとめた。在学中にCIIS（カリフォルニア統合学大学院）へ交換留学。2011年より個人開業。これまで様々な対人援助職の人々を対象に、ワークショップや個別セッションを行う他、木にうたいかけて木と土地を癒す、おとだまのうたを歌う、絵本の読み聞かせ、楽器演奏、執筆、緩和病棟での実践など、多彩な活動を行っている。

2 G. I. グルジェフの思想と実践 浅井雅志先生 良心館1階 RY104

基調講演でお話頂くグルジェフについて、語り残した点やさらなる疑問にじっくりと応えて頂きます。

講師：浅井雅志先生

京都橘女子大学教授。同志社大学大学院修士課程、マンチェスター大学大学院博士課程修了、同大学よりPh.D.所得。1975年以来、グルジェフ思想に基づいた「ワーク」に関わり、イーデン・ウェストキョートを主宰する。著書『モダンの「おそれ」と「おののき」』松柏社、訳書にG. I. グルジェフ著『ベルゼバブの孫への話—人間の生に対する客観的かつ公平無私なる批判』『生は「私が存在し」て初めて真実となる』、P. D. ウスペンスキー著『奇蹟を求めて—グルジェフの神秘宇宙論』（いずれも平河出版社）等多数。

3 坐禅 佐々木奘堂先生 良心館4階 RY429教室

禅で大事なことは、縛られているようなあり方、すなわち、萎縮していたり、外に衣（依存するもの）を追い求めていたりしがちな現状を脱して、自分の人生の「主人公」となって主体的に生きていくことです。ともすると、「坐禅」ということ自体が、体や心を萎縮させ固めるものとなったり、特殊な衣（特別な身体技法や呼吸法や瞑想法など）を追い求めるものとなったりしが

ちです。そのように萎縮し、技法に振り回される坐禅でなく、私たち各自が本来もっている力を存分に発揮するようなあり方で、「主」となって生きていく姿勢を共に学んでいきたいと思えます。

講師：佐々木英堂先生

1966年、茨城県生まれ。1985年、東京大学理科I類入学。専門では、教養学部にて村上陽一郎先生のもと科学論を学ぶ。1990年から5年間、京都大学教育学部大学院にて、河合隼雄先生のもと、臨床心理学を学ぶ。それと並行して、相国寺にて禅修行を続けるが、1995年から2年間の出家修行。大学に戻り、1998年から2年間、京都大学助手を勤めるが、仏道（禅）修行を最優先することにし、2002年に完全に出家し、相国寺専門道場にて修行。2011年12月、大阪にある天正寺住職に就任。寺での坐禅会をメインに活動。依頼があれば外でも坐禅指導や講座を行う。

神秘体験のコスモロジー的な意味

塩田 洋子

カリフォルニア統合研究大学院 哲学と宗教学部

キーワード：コスモロジー 神秘体験 タントラ哲学 瞑想 スピリチュアリティ

【目的】

深い瞑想で経験しうる宇宙意識との一体感は、一般に個人的なものとされ、自分と他の存在、または社会、地球、宇宙とのつながりの中で議論されることは少ない。一個人のこうした神秘体験を、個人を超えて社会、地球、宇宙という大きな文脈の中で見ていくと、どういう新しい意味が見いだされるかを考察する。

【対象と方法】

筆者自身の深い瞑想における神秘経験を現象学的に記述したものを、コスモロジーというコンテキスト（文脈）において、その新しい意味を見いだそうとする。筆者の瞑想はアナンダマルガのタントラ哲学の教えに基づくものであり、ここで扱われるコスモロジーはテイヤール・ド・シャルダン、トーマス・ベリー、ブライアン・スウィナムの提唱するコスモジェネシス（137億年前に誕生し、それ以来進化し続ける宇宙の物語）というモデルにもとづいている。

【考察】

タントラ哲学を20年以上修行し教えてきた筆者は、深い瞑想で宇宙意識との一体感を体験した。それは自分自身の悟りまたは解放への一步として意義があるものの、この世を超越することに重きをおく修行は、この世界（地球や宇宙も含めて）の美しさや他の存在との深い関わりによって生まれる感動や畏怖の念が遠のいてしまう経験もした。

テイヤール・ド・シャルダンのコスモロジーに出会い、自分の神秘体験を、137億年かけて進化してきた宇宙のなかに位置づけた時、それが宇宙の無限なる内面の体験であることを理解した。また美しさ感動し驚きや畏怖(awe and wonder)を感じるのは、宇宙のあらゆるものとお互いに主体性をもった存在として関わること（トーマス・ベリーの言う Communion of subjects）であり、人間には宇宙の誕生の時から存在する美しさを人間という形で（その内面と外面で）表現するという使命があることも学んだ。

従って、神秘体験などの深い内面的な自己実現をめざしたアプローチと、美しさ感動し驚きや畏怖の念を持って他の存在と深いつながることと、両方のアプローチの統合が大切な意味を持つてくる。神秘体験から生まれる他の存在への慈悲の念に、他の存在とつながることの深い喜びが加わり、自分は宇宙の進化に参加しているのだという自覚が生まれると、こうした神秘体験のコスモロジー的な意味は、個人の自己実現と、社会や地球のよりよい未来に貢献するための大きな鍵となるであろう。

【結語】

個人で経験する神秘体験は、自我を超えたより大きな内面の存在との一体をめざす姿勢であり、人間の段階で始めて可能になった宇宙の進化の一旦であることがわかる。神秘体験は個人を悟りへと導くだけでなく、この経験により個人と他者（人間も含めたあらゆる存在）との深い関わり

必要な慈悲の念が深まり、また、個々に存在する事象の背後にある全体（wholeness）を体験することにより、すべてはつながりのなかに存在することが日々の生活でも実感できるようになる。さらには、そういう視点をもちながら日々進化する宇宙に一人の人間という形で参加していくことで、超越世界のみならず、今この現象世界で生きることの大きな意味が見いだされる。

【引用文献】

- Anandamurti. (1998). *Ananda Marga Elementary Philosophy*. Kolkata, India: Ananda Marga Publications.
- Berry, T. (1988). *The dream of the earth*. San Francisco, CA: Sierra Club Books.
- Berry, T. (1999). *The great work*. New York, NY: Three Rivers Press.
- Inayatullah, S. (2002). *Understanding Sarkar: The Indian episteme macrohistory and transformative knowledge*. Leiden, Germany: Brill.
- Kelley, K. W. (Ed.). (1988). *The home planet*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Sarkar, P. R. (1993). *Idea and ideology*. Kolkata, India: Ananda Marga Publications.
- Sarkar, P. R. (1999). *Liberation of intellect: Neo-humanism*. West Bengal, India: Ananda Marga Publications.
- Swimme, B. (1996). *The hidden heart of the cosmos: Humanity and the new story*. Maryknoll, NY: Orbis Books.
- Swimme, B. (2001). *The universe is a green dragon: A cosmoc creation story*. Rochester, VT: Bear & Company.
- Teilhard de Chardin, P. (1978). *The heart of matter*. San Diego, CA: Harcourt.
- Teilhard de Chardin, P. (2003). *The human phenomenon*. Brighton, UK: Sussex Academic Press.

現代の生殖医療現場が抱えるジレンマ —チーム医療を基盤としたメンタルケアの提案—

竹重 幸

名古屋大学大学院環境学研究科

キーワード：生殖医療・当事者・カウンセリング・ストレス・チーム医療

I. 問題と目的

本来生殖医療とは、不妊当事者の要請により初めて行われるもの（自由診療）であり、当事者との対話を基本とし「患者不在の医療」であってはならない。必ずしも当事者は治療に対して自発的動機があるとは限らないからである。つまり、受診行動には社会的背景や家族や社会環境による圧力が働いているケースも少なくはない。ゆえにどのような動機をもって不妊治療に臨んでいることを知ることから治療が開始する。数々の研究からも生殖医療の特殊化、専門分化が進んだ医療体制への反省から当事者をとりまく問題を多職種による複数の視点から検討することの必要性が取り沙汰されているものの、未だその解決には至っていない。

本研究では、ストレスと不妊との関連性を明らかにし、当事者を全人的な存在としてケアしていくために必要な心理的資源について検討する。具体的には、カウンセリングの必要性、および治療段階や期間によるサポート、治療を始める動機について調査し、多職種連携による支援のありかたや取組みについて検証する。

II. 研究方法

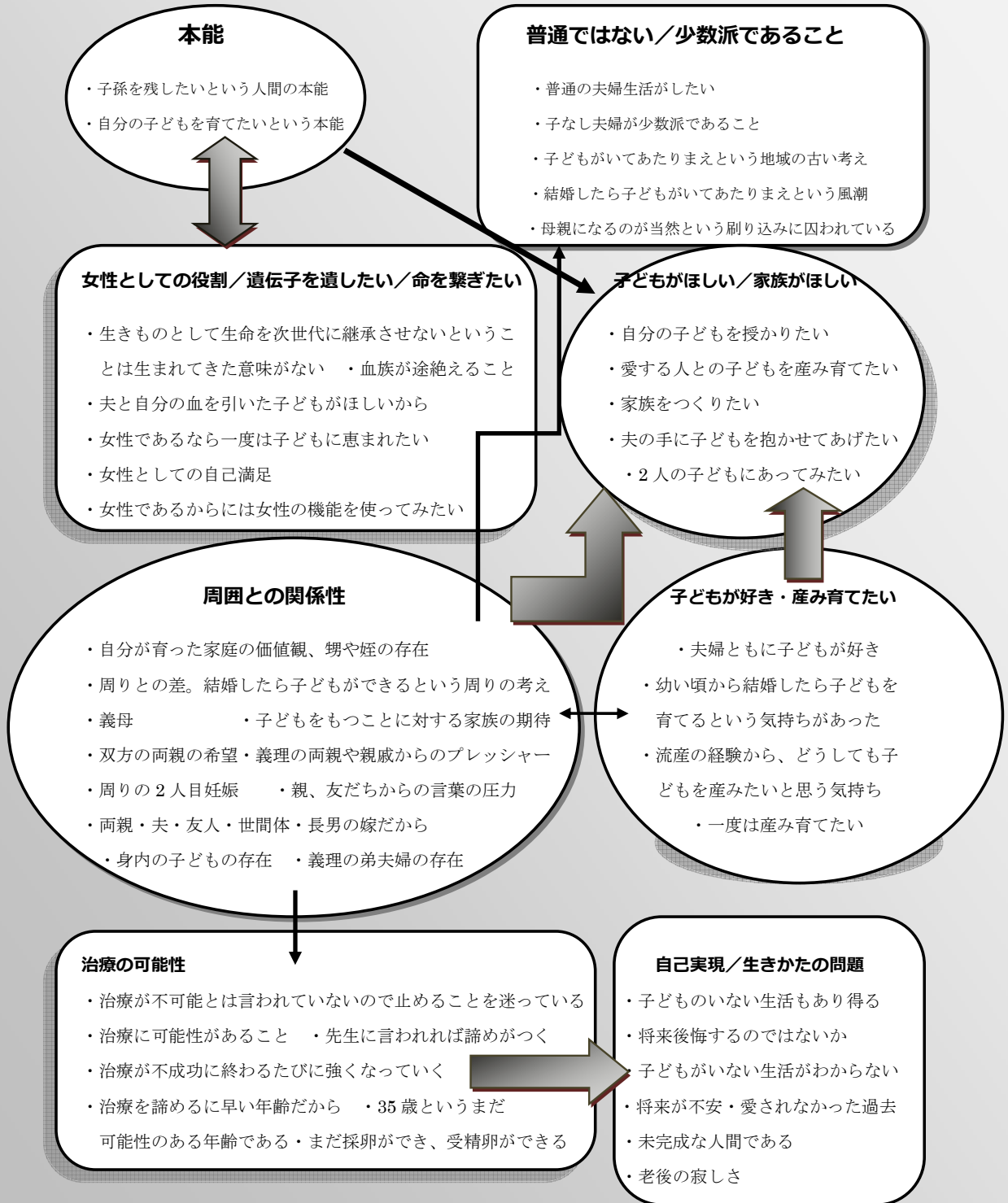
承諾をいただいた医療機関や当事者の会の協力を得て、独自のホームページ『不妊カウンセリング研究』を媒体にアンケート調査を行った。対象は「不妊治療を経験する女性」とし、「不妊ス

トレス尺度（小泉）」（36項目／4件法）を実施／分析（因子分析）し、治療段階および治療期間における不妊ストレスを比較するために分散分析にて検討した。（有効回答数 158）。その結果を踏まえて、カウンセリングの観点から「誰が／何を／どのような」サポートを必要とするのか、および治療を始める動機と考えられる「子どもにこだわる理由」について記述式で聴取しKJ法にて質的検証を行った。調査報告・結果などは一部のみを後述し、他は当日に報告する。

III. 結果／考察

不妊ストレス尺度より、配偶者との関係性、自分の親との関係性、医師との関係性について最もストレスを感じているものの、「現状を訴え、話を聞いてほしい相手」の質問項目については、配偶者と医師が上位を占めた。他のマイノリティの問題と比較して不妊が特徴的なのは、家族からもソーシャル・サポートが受けられないことが多いことである。これまで言えなかった当事者の語りや真摯に聴く相手が存在することで、個人の「生殖の物語」についてはじめて理解することができる。そのうえで「生」「姓」「性」における答えのない葛藤を問いつけることで、その先に小手先の患者満足を超えた人としての援助があるのではないかと思う。なお生殖医療現場における心理支援のありかたやその取組みについては現在検討中である。

Table1 あなたが子どもにこだわらない生きかたを考えることを妨げているのは何ですか



←→ 矛盾関係 → 因果関係 (負)
 → 因果関係 (正) ←→ 相互関係

日本古層の生命観とその現代的意義 —縄文土器文様の分析と意味解釈から—

呉 清恵

大阪経済法科大学アジア研究所

キーワード：縄文文化・比較構造分析・物質文化・スピリチュアリティ

【目的】

縄文時代(約14,000-500年前)の土器に刻まれた文様、特に縄文中期(約5,500-4,500年前)にその高揚を見せた過剰で精緻な文様は、土器の実用性や効率性からは説明できないことから、土器を製作者が属する部族の世界観が表現されていると考えられている。筆者は「出産土器」と呼ばれる人面付深鉢土器を詳細に分析して、文様構造と主たるモチーフを抽出し、関連する民俗学的資料と比較することで、「創造」に関連する観念、その生命観の内容を仮説として提起する。そして、その世界観の歴史的意義、及び、現在の私達が直面する課題を乗り越える上でそれをどのように活用しうるか等について考察を加え、参加者の意見を伺い、今後の考察の基礎とした。

【対象と方法】

1) 土器文様分析の対象は、中部高原に開花した縄文中期勝坂文化(紀元前約3,300年から2,900年頃)の人面把手付深鉢土器で、土器面の文様構造の分析が可能な状態に復元された土器の内、資料の入手が可能であった14個である。文様の意味内容を探るために、文様の分析対象とした土器の出土地域と同じ地域にある諏訪大社上社で行われていた「御室神事」という神の懐妊と新しい生命の誕生に関わる古祭祀の民俗学的情報とモチーフを比較する。2) 考古資料の意味解釈を行う際の方法上の課題として、1)データの選

択や解釈における恣意性の問題。2) 解釈の検証の問題、つまり、異なる文化要素の構造を比較する問題と、比較する文化遺物の時間的隔たりの存在の問題がある。第一の課題に関しては、遺物の出土状況だけでなく、歴史的文化的コンテキストを考慮することによって克服を試みる。第二の課題に関しては、岡正雄とレヴィ＝ストロースの理論を統合した歴史的比較構造分析というアプローチを提示して、それに従って分析を進めることで克服を試みる。

3) 比較分析は大きく分けて次の三つの内容で行った。a) 対象とする土器の基本構造と中心的モチーフを抽出し、出土状況その他を考慮して、その意味解釈の作業仮説を提示する。b) 同じ地域における異なる時期からの文化遺物の比較を有効なものとするために、縄文中期以降、中部高原関東地方に現れた土器や文化遺物の中に、その構造とモチーフの継続性が見られるかどうかを調べる。c) 土器文様の基本的構造モチーフと、同じ諏訪地方において縄文時代に由来すると考えられているミシャグジ信仰に基づく古祭祀のモチーフと比較し、それらの類似性に基づいて仮説的解釈の検証を試みる、というものである。

4) 上記の内、最も詳細な分析が必要なのは第一の作業仮説の提示である。まず、出土状況を検討し、土器文様の詳細な分析を行った。分析の説明は省略する。分析の結果、これら全ての土器において、文様構造、文様モチーフ、文様要

素の配置に共通の原理が存在することが確認される。それは筆者が「三の構造」と呼ぶ、非対称の一对とその中心に第三の単位が表現されたものと、三単位モチーフとその変形の存在である。原型的土器(範型土器)とみられる二つの土器では、「三の構造」の「背後」に更にもう一単位が表現されている。

5) 文様モチーフと文様構造の詳細な分析にもとづく筆者の作業仮説は、「三の構造」は、創造のプロセスにおいて両極が結びあう際、必ず不可視の力が介在し、それによって両極が統合されることを示す。また、三次元の最小単位は正四面体で表されるように、物質界における生成においては三単位が最小単位になるが、その三単位が結びつく為には、背後で不可視のチカラが作用するメカニズムが働いており、物質界の創造における最小単位は、「三プラスー」の構成で表されるということである。この両極を結びつける力や、物質界で生命が創造される際に背後に存在する不可視の力は、どこからともなく外からやってくる聖なる力であると感知されていたであろうことが、モチーフ構成からうかがわれる。

6) 縄文中期後半以降、後期から晩期に至るまで各時期とも三単位や三単位モチーフの存在がみられ、「三の構造」で表された観念の継続性が確認される。

7) 範型的な人面把手土器が出土した荒神山遺跡に近接する諏訪大社上社前宮の冬期の御室神事は、その起源が最も古いとされている。それは、大祝という幼童の現人神が、冬至が過ぎた12月22日に御室に入り、その後、御笹を依り代にして天から降りてくるミシャグジ神と、三体の蛇で現れる女性的なソソウ神が入り、約3ヶ月間をそこで過ごした後、春に大祝が新しく穀物霊として御室から出るという構成をとる。これは、明らかに聖婚のモチーフを表わすが、ここで注目すべきは、ソソウ神が三匹の蛇によって表されているということ。つまり、御室神事の生命創造のモチーフ構成は、範型的な人面把手土器にみ

られた構造と一致している。これは、人面把手土器の「三プラスー」或いは「三の構造」は生命創造の世界観に関わる観念を示すという解釈を支持するものである。

【結果と考察】

筆者は、岡正雄の「範型継承」及び文化の重層構造の理論を基本的に支持しており、当分析で見られた生命創造の世界観に関わる「三の構造」および「三プラスー」に込められた観念は、日本、さらにはアジア太平洋文化圏の古層の観念として捉えることができる。それは、日本のみならず、アジア太平洋文化圏の古層の観念でもあるといえるかも知れない。例えば『老子道德経』第42章の最初の節の内容をそのまま示唆するものであるといえる。また、南洋の文化の影響がみられる済州島の建国神話における三氏、三という数字が頻繁に出てくることも注目すべき点である。

この観念は一般的に以下の内容を示唆する。即ち、両極を結ぶ不可視のチカラは、偏在する根源のチカラである。このチカラは私達の意識するしないにかかわらず、常にイノチを支えているものであるが、私達が相反するものに直面するとき、この根源のチカラに意識を向けることで、相反するものの一方を否定することなく相反するものを認めながら、両者を統合、或いは調和することができるということを示唆する。このことは様々なことに適用可能であると思う。更に、「三プラスー」について。創造のプロセスにおいて、両極のチカラのみならず根源のチカラを物理的な単位として意識にのぼらせて、これら三者を意識することが、何かを物質化・現象化する際に物理にかなった在り方であるということ。また、上記三者の内、中心の力はニュートラルな力である故、意識によって現象化の方向付けを行うのがこの部分であるかもしれない。

気功における内的プロセスとその循環構造 —気功テキストのナラティブ分析を通じて—

蒲生 諒太

京都大学大学院教育学研究科

キーワード：気功・心身相関・一人称科学・ナラティブ

【問題】

中国の養生法として発展した気功は近年、心理セラピーとしての役割にも注目されるようになってきており、実証研究が進んでいる(Wang et al, 2013)。実証研究とともに対人援助領域におけるモデル構築と総合研究も行われている(Lee et al, 2009)。この中で気功は「身体」と「精神」をつなぐ技法として扱われる。これら先行研究に対して気功における身体(ボディワーク的な「動功」の側面を含む)と「調心」と呼ばれる内的(心理的)プロセスとの関係を明確にした研究は、石田(1989)など先駆的な研究はあったが、現代の気功実践を対象にしたものに限れば少ない。そのため、モデル構築に不完全さがある。

【目的】

本研究では気功の内的プロセスを整理して身体との関係を明らかにする。そのため、文化的歴史的文脈の中で蓄積された実践についてのナラティブ=テキストを研究対象とする。

【方法】

(1)対象

研究対象として現代中国における気功実践の基本的なテキストから『中国気功学』(馬, 1999)を選んだ。津村(1990)によるとこのテキストは気功の総合的教科書として定評を得てきたものであり、中国紀行の全貌を一望にするのもっともよい

入り口であるとされる。このように当該テキストに現代、中国で実践される気功の代表的特徴が記されていると考えられる。

(2)一人称変数

本研究では内的プロセスの整理のため、分析概念として「一人称変数」(first person variable)を用いる。この概念はジェンドリンら(Gendlin & Johnson, 2004)が示した新しい変数概念である。彼らの議論が持つ現象学的な含意に本研究では立ち入らず、この変数を単純に「外的には観察できない内的プロセス、対象を定義し定式化したもの」という意味で用いる。

(3)手順

テキスト内の内的プロセス・ナラティブを抜き出し、それらを一人称変数として整理した。

【結果】

気功の一人称変数は「内的状態」、「内的対象」、「内的行為」、「内的反応」として分類できる。

(1)内的状態

気功において目ざすべき内的状態として「入静」がある。この入静へと至るため、実践において望まれる状態を「放松」と呼ぶ。

(2)内的対象

一方で実践上、望ましくない「雑念」や「妄想」というものが生じることがある。これらは除かれるべき対象として詳細に分類、定義され、これらの除去が「放松」の第一歩とされる。

(3) 内的行為

気功は調身、調息、調心の三要素が総合されたものであるが、調心として様々な内的行為が実践のプロセスに混ぜ込まれる。それらは基本的に「放松」、そして「入静」へと至るためのものである。主に通常状態から放松へと至るためのものであるとともにその放松からさらに入静へと至るためのものであり、さらに実践中に生じる「雑念」や「妄想」を除くためのものでもある。これらが明確に区別されることはないが、「雑念」や「妄想」を除くための行為は単独のものとして特記される。

内的行為は身体との関係性でいくつかに分類できる。身体(の一部)への意識の集中(「内視」など)、身体とイメージや言葉との関連付け(たとえば、「字句の黙然」)などである。

(4) 内的反応

内的行為にはいくつかの禁止事項や注意事項があり、それらが守られないとき、実践中の身体にネガティブな反応が生じる。たとえば、「走火」、「入魔」と定義されるこれら反応は「偏差」と呼ばれるものの一種である。

一方で、内的反応には先に提示した内的状態「放松」や「入静」というポジティブなものもある。つまり、気功においてはある状態は内的行為の結果としての反応として理解される。

【考察】

以上の分析で示された気功における一人称変数には、固有の循環構造がある。内的状態と定義された「入静」、「放松」に至る中で「雑念」や「妄想」などの内的対象が生じる。これら内的対象を除き、望むべき状態へと向かうため、様々な内的行為が定義される。この内的行為の失敗により「偏差」という望まれない内的反応が生じる。他方、この内的行為が成功するなら「入静」、「放松」という内的状態＝内的反応が生じる。このように、ある内的行為は特定の内的対象を除いたり、ある内的反応を引き起こし特定の内的状態へと至らせたりする。そして、望むべき内的状態は特定の

内的行為が至るべき一種の理想として動機付けた働きを持つ。

身体はこの循環構造において内的行為の対象(標的)となったり、内的反応を確認するための媒体になったりする。身体は同時に内的行為の領域をも定義し、さらに内的反応は身体の反応として定義される。

このようにして気功における内的プロセスは身体を介して、そして身体という領域において循環構造を作り出す。気功において身体は内的プロセス＝活動する意識に対して一つの領域と媒体として与えられる。同時に意識は身体において活動するものとしての地位を与えられるのである。

【引用文献】

- Gendlin, E. T. & D. H. Johnson (2004). Proposal for an international group for a first person science. 2013年7月29日閲覧. The Focusing Institute:
http://www.focusing.org/gendlin_johnson_i_science.html
- 石田秀実(1989)『気・流れる身体』平河出版社
- Lee, M. & Leung, P. Ng, S. M., Leung, P. P. Y., Chan, C. L. W. (2009). *Integrative body-mind-spirit social work*, New York: Oxford University Press.
- 馬濟人(1990)『中国気功学』浅川要監訳, 東洋学術出版社(馬濟人編著『中国気功学』陝西科学技術出版社を底本に翻訳)
- 津村喬(1990)「解題」馬, 前掲, pp. 497-506.
- Wang, F., Man, Jenny K. M., Lee, E. O., Wu, T., Benson, Herbert., Fricchione, G. L., Wang, W., et al. (2013). The Effects of Qigong on Anxiety, Depression, and Psychological Well-Being: A Systematic Review and Meta-Analysis. *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine*, vol. 2013, 16 pages.

イスラエルにおける「平和の文化」の構築 —マインドフルネスの実践による市民社会からの意識改革—

吉村 季利子

大阪大学国際公共政策研究科

キーワード：紛争解決・社会的信念・マインドフルネス・相互理解・内的平和

【はじめに】

イスラエル・パレスチナ紛争は、開始から65年以上の年月を経て、いまだ解決はおろか、土地と資源、難民の帰還権、占領地の拡大、入植者の増加など、問題は複雑さを増す一方である。この紛争の解決には、これまでも多くの政策的試みがなされ、1993年のオスロ合意など、和平協定締結に向けた大きな進歩も見られた。にもかかわらず、こうした和平合意は紛争の再発や内部闘争で何度も破られ、一進一退を繰り返している。

こうした現状を打ち破り、この紛争を解決に導くためには、単に政治的・外交的努力では足りず、紛争地の人々の心理的・精神的部分にまで踏み込んだ総合的・全体的・網羅的な解決案とロードマップの作成が急務である。そこで、その端緒を教育・実践・相互理解の促進といった市民社会の草の根活動に求め、人々の意識の根底からの改革と「平和の文化」の構築、すなわち心の内面から維持可能な平和の道を模索する。

本報告では、先行研究をもとに、「イスラエル・パレスチナ紛争長期化の背景に個人・集団・社会で共有されている意識がいかに関与しているか」を明らかにすると共に、この紛争継続に寄与するイスラエル社会に内在する社会的信念¹⁾の構造を解明する。さらに、これを転換する方法として「マインドフルネス」に注目し、イスラエルのNGOが行ったリトリートに参加し、調査を行った結果を報告する。

【「平和の文化」の構築】

紛争解決における社会心理学の応用は、歴史的には新しく、20世紀半ばに発展した。政治学や国際関係学の平和研究分野においては、ヨハン・ガルトゥングが提示し

た「積極的平和」や「構造的暴力」の概念により、人間の心理と社会的暴力との関係は、広く認知されるようになってきた²⁾。紛争の背景には様々な要因があるものの、「構造的暴力」としての不条理な社会構造を変革する担い手は、一人ひとりの個人である。1999年9月、国連は「平和の文化に関する宣言」において、世界に平和の文化を促進・強化する方針を掲げ、その第一条で「平和の文化とは（中略）価値観、態度、行動の伝統や様式、あるいは生き方の一連のものである」とした。その上で、人権・平等・民主主義といった基本的概念や、国際的平和と安全保障および紛争の平和的解決を担う姿勢を培い、これを促進する教育と具体的プログラムを提示、社会的基盤を担う「平和の文化」の構築に乗り出した³⁾。

こうした動きは、国際社会をあげての内側からの平和構築の試みと言えるが、これこそまさに、社会心理学・政治心理学の分野における紛争研究の成果のひとつといえるだろう⁴⁾。

【解決不能な紛争】

その一方で、開始後65年以上が経過したイスラエル・パレスチナ紛争は、政治心理学者バー=タル氏が北アイルランド紛争などと同様「解決不能な紛争：intractable conflict」と位置づけ、その複雑さを明らかにした。

イスラエル・パレスチナ紛争は、他の民族紛争と比較して、いくつかの点で特異なケースと言える。第一に、被害者と加害者関係の錯綜がある。ユダヤ人側は、対パレスチナ紛争において優位にありながらも、ホロコーストの経験から「被害者意識」が拭い去れないでいる。第二に、いわゆる多文化社会における移民と原住民の力関係が政治的にも社会的にも逆転している。ユダヤ人のパレ

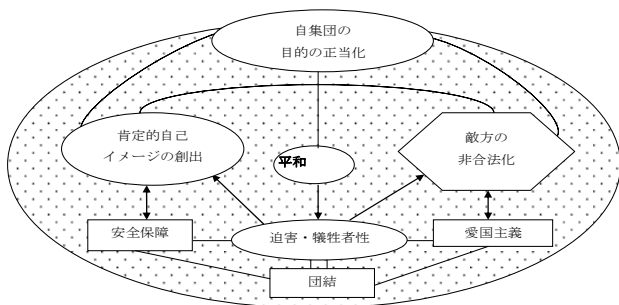
スチナへの移住は、1800年代後半のシオニズム運動以降顕著になり、国家としてはまだ60年余りだが、政治力や経済力はもちろん、生活レベルは非常に高く、パレスチナ人とは比較の対象にすらならない。第三に、紛争の特徴として非対称紛争、すなわち当事者間の軍事力・政治力・経済力に極端な開きがあることが挙げられる。イスラエル軍は世界第13位に位置づけられるほどの軍事力を有するが、パレスチナには軍事力と呼べるものはない。しかも、パレスチナは2012年11月末の国連総会決議でようやく「オブザーバー国家」に昇格したばかりの「自治政府」である。この両者の非対称性が、紛争をさらに複雑にしているといえよう。

このように、民族対立や社会構造が紛争の長期化・持続化を後押しするだけでなく、一般市民の心の奥深くに埋め込まれた感情や内的心理状態が社会的基盤となって、あらゆる場面—すなわち、単に日常生活だけでなく、規範形成や政治的判断にまで影響を及ぼす、というものである⁵⁾。

【社会的信念の形成】

こうした背景から、イスラエル社会には以下のような「社会的信念：societal belief」が形成された。

イスラエル社会の社会的信念



出典：Rouhana and Bar-Tal (1998) より筆者作成

社会的信念とは、の内容は、①自集団の目的の正当化、②肯定的自己イメージの創出、③敵方の非合法化、④迫害・犠牲者性、⑤愛国主義など、多岐にわたる。社会的信念は相互に絡みあい、分化することは困難である上、これら社会的信念に加え、集合的感情、集合的アイデンティティ、集合的記憶が紛争の長期化に寄与していると考えられ、研究が進められている⁶⁾。

【マインドフルネス・リトリートの効果】

こうした複雑な社会的信念を軟化させる方法として注目されるのが、マインドフルネスの実践である。「マインドフルネス」とは、意識を「今、ここ」に集中させることで、心の安寧、平安が得られるとされ、医療分野やビジネス、政治においても活用されている⁷⁾。

2013年2月にイスラエルで開催されたマインドフルネスのリトリートに参加し、プログラムの参加者にアンケート調査およびインタビューを行った。今回の調査は、マインドフルネスによる瞑想や実践が社会的信念に影響を与えうるかどうかの評価基準を検討するため、試験的な事前調査として行ったため、定量分析を行う十分なサンプル数を得ることができなかつたものの、アンケート調査およびインタビュー結果をもとに、個人によるマインドフルネスの実践がもたらす社会的効果の考察を試みた。発表では、その結果を併せて報告する。

【引用文献】

- 1) Bar-Tal D. (2011) *Intergroup Conflicts and Their Resolution: A Psychological Perspective*. NY: Psychology Press. (D. バル・タル編著、熊谷智博・大淵憲一監訳『紛争と平和構築の社会心理学—集団間の葛藤とその解決』北大路書房、京都、2012.)
- 2) Lewin K. (1997) *Resolving Social Conflicts and Field Theory in Social Science*. Washington: American Psychological Association. ヨハン・ガルトウング著、藤田明史編著『ガルトウング平和学入門』法律文化社、京都、2003.
- 3) UN General Assembly (1999) *Declaration and Programme of Action on a Culture of Peace*. <http://decade-culture-of-peace.org/resolutions/resA-53-243B.html> (accessed 14/07/2013)
- 4) Bar-Tal D. (2011) *op. cit.*
- 5) Rouhana N. N. and Bar-Tal D. (1998) Psychological Dynamics of Intractable Ethnonational Conflicts: Israeli-Palestinian Case. *American Psychologist*, 53(7), 761-770.
- 6) Bar-Tal D. (2011) *op. cit.*
- 7) Kabat-Zinn, J. (2005) *Coming To Our Senses: Healing Ourselves and the World Through Mindfulness*. New York: Hyperion.

精神の力(la force spirituelle)とつくることの意義

山田 良憲

立命館大学大学院文学研究科（研究生）

キーワード：ベルグソン・精神・homo faber・生命・知性

【目的】

本研究は、フランスの哲学者アンリ・ベルグソン（1859-1941）の哲学をふまえながら、ベルグソンが『精神のエネルギー』において述べた「精神の力(la force spirituelle)」と彼の哲学における「つくること」の意義との関係を探る試みである。

【対象と方法】

本研究では、『精神のエネルギー』所収の「意識と生命」という講演論文を「精神」キーワードにして読み解きたい。また『思想と動くもの』の「緒論第二部」、『創造的進化』などにおける「homo faber」の考え方とすりあわせることで、ベルグソン独自の精神観をそこに見出したい。

【考察】

一般的に精神というと物質ではないものとして考えられる。たとえば、もし魂と身体という区分を設けるならば、精神とは、身体の物質性に対する魂の精神性として考えられる。また「精神(esprit)」がラテン語の「息、呼吸(spiritus)」に由来するように、精神とは、非生命的な物質に対する生命としても考えられる。あるいは、存在しないもの（眼にみえないもの）と存在するもの（眼に見えるもの）を精神と物質の区別と考えることもできるだろう。いずれにしても、精神をどのように考えようと、基本的には、精神は物質（延長）に対するものとして考えられる。

ベルグソンは、「意識と生命」という講演で、

精神の特徴を次のように定義している。

「明らかに、ひとつの力がわれわれの前で働いている。その力は束縛から逃れ、また自らを超えて、自らが持っているものを与えようとし、ついには自らが持っている以上のものを与えようとする。精神にこれ以外の定義を与えることができるであろうか。そして、もしも精神の力が存在するとすれば、自らが持っているもの以上のものを引き出す能力以外には、それを他のものから区別するものはないのではないのだろうか。」

ベルグソンは、精神を心理状態や抽象的な概念のように、静的な状態として捉えているのではなく、動的な働くものとして捉えている。つまり、ベルグソンにおいては、精神という概念が先にあって、その概念について考えているのではなく、ある働きが精神として考えられているのである。

そのようなベルグソン哲学において、精神の働きとして考えられるものが、「つくること」である。

ベルグソンは、「魂と身体」という講演でも、「精神とは、自らが含んでいる以上のものを自分から引き出すことができ、受け取った以上のものをかえし、もっている以上のものを与えることができる力にほかならない」と述べており、精神とは、自分から何かを引きだし、それを与える力として考えている。またそれは、「少しのものからたくさんものを引き出し、何でもないものから何かを引き出し、世界のなかに豊かさを絶えず何かを付け加えていく努力による人格の拡大」であり、

「自己による自己の創造」である。

このような精神観は、**homo faber** についてのベルグソンの考え方に直結する。

ベルグソンは、「知性は手から頭に昇ってくる」と考えており、手をつかって創造すること、自分で何かをつくりだすことが知性であると考えている。ベルグソンの考える知性とは、一般的に考えられているように、知識を詰め込んだり、それを器用にまとめたり、集めた知識を素早く処理することではない。

「物質的にも精神的にも創造し、事物を工作し自分自身をも工作するのが人間の本質だと信じている」とベルグソンは述べているが、それがまさに **homo faber** という考え方であり、知性の本質なのである。

ベルグソンの進化論によると、生命の進化には、脊椎動物と節足動物の方向に二つの大きな潮流があり、進化の過程で知性が発達した方向が人類であり、本能が発達した方向が昆虫であった。

このような進化論は、人間が知性的動物であると同時に精神的動物であるということを裏付けている。微生物から脊椎動物にいたる生命全体のなかで、人間にのみ特権的に知性が与えられたという事実と、精神が人間にのみ与えられたという事実（昆虫や植物、人間以外の動物を精神的な生物としては考えないという事実）が、つくるといふ働きによって合致するのである。

【結語】

以上のように、ベルグソンの精神についての考え方を追っていくことから、つくることの意義について考えてみた。

既製品があふれかえる現代社会において、われわれの多くはつくることを忘れている。それは、現代において知性という言葉の意味が「つくること」ではなく、「知識をあつめること」や「知識を処理すること」に変質してしまったことと無関係ではないだろう。

つくることは、自分の手で確かめることであり、つくる努力というものほどどこまでいっても自分を裏切らない。そして、つくる努力とは、精神力を意味するのであり、生命としての人間にとって本質的なことなのではないだろうか。

【引用文献】

Bergson, Henri (1907) *L'évolution créatrice*, Paris : Presses Universitaires de France.

Bergson, Henri (1919) *L'énergie spirituelle*, Paris : Presses Universitaires de France.

Bergson, Henri (1934) *La pensée et le mouvant*

Paris : Presses Universitaires de France.

魔境について—「西遊記」の構造にふれて—

塚崎 直樹

つかさき医院

キーワード：魔境・坐禅・修行・スピリチュアリティ

【目的】

坐禅の修行を行っているとき、坐禅が深まるにつれ、坐禅中に色々な体験をするようになる。超常的な体験、不安な体験、歓喜の体験など種々の体験がある。意識の変容に伴って、知覚の変容、幻視や幻聴などの幻覚体験や妄想的な体験なども出現する。禅の世界では、それらがどれほど神秘的なものに見えようと、一切関わらず、坐禅を続けていくべきと教えている。それらはすべて、「魔境」と捉えられている。このような現象は、坐禅の場合だけでなく、身体を通じた宗教的修行の過程で一般的にみられるものである。それらは、修行の妨げとして認識されている。今回は、魔境的な体験の実例を取り上げて、その意味を考えたい。考察を深めていく素材として、中国の『西遊記』を取り上げて見たい。

【事例】

事例 1

受診時 30 代。男性。

国立大学理工系学部卒業後、研究職として大企業に就職、結婚。10 年ほど勤務した段階で、仕事内容に疑問を感じ退職。以前より関心の高かったスピリチュアルな世界を見極めたいと、アジアの A 国に渡航。都市を離れたアシラムに滞在し、瞑想を実践した。開始後 1 ヶ月ほどした段階で、同じく修行していた先輩格のヨーロッパ人から、不断に命令をされているように感ずるようになり、その声が聞こえだし、やがてすべてが監視されているように感じられた。混乱状態で、瞑想を

続けられなくなり、施設側から帰国を促された。日本に帰ってからも、問題の人物からの指示の声は消えず、家族がうながして精神科病院を受診した。診察の結果、統合失調症の疑いで、即入院となった。抗精神病薬の薬物療法が開始されたが、症状は改善せず、過鎮静の状態が続いた。家族は治療の妥当性を疑い、外泊中の患者を連れて、筆者の勤務病院を受診した。幻覚体験が見られたが、疎通性が保たれ、幻覚に対しても、距離を取って観察が可能となっているので、修行中の異常体験反応と考え、退院し外来通院に切り替えるように促した。

退院後は、急速に薬物を減量させたが、幻覚体験後の精神的憔悴は続いた。その後、勉学の再開を希望し、別の国立大学へ編入学。成績優秀のため、大学院博士課程まで進んだが、年齢的限界を感じ、研究者となることは断念した。その後は、本人の関心に合わせた自営業的な作業を続けている。

事例 2

受診時 20 代。女性。

私立大学大学院在学中、海外文化研究のため、アジアの B 国に滞在中、宗教研究の一環として、修行施設に入所した。瞑想を中心とした修行を開始して数週間後、瞑想を指導しているヨーロッパ人から、本人が不在時にも修行上の注意をされている声が聞こえるようになった。次第にその声が大きくなり、注意の内容も詳細になってきたことから、不安を来たし、混乱状態となった。施設側か

ら修行の中止と帰国をうながされ、帰国したが症状は改善しなかった。本人は、修行上に起こったことであるため、宗教的な助言が必要だと主張し、各地の宗教者を訪問し、助言を求めたが効果は乏しかった。夜間興奮し、突然に外出し、山間のお寺を訪問するなどの行為が重なり、家族が筆者の医療機関に相談に訪れた。無理な説得をひかえるように勧めたが、数日後本人が自発的に受診した。修行体験などを数回にわたり聴取したところ、打ち解けて、服薬を希望した。少量の抗精神病薬を処方したところ、幻聴が減少していった。その後、症状が再燃することはあったが、薬物療法により、就労しながら、症状のコントロールは行えている。
(コメント)

二例とも、アジアでの修行中、先輩格の西欧人から、指導されるという幻覚妄想体験のため、修行を中止し、帰国している。帰国後も混乱が続いたが、修行体験を尊重する関わりによって、治療関係が形成され、症状の改善につながった。

【比較検討】

三蔵法師の経典探索に孫悟空が協力するという『西遊記』は、玄奘三蔵の体験をモデルにしたものであるが、物語の構造は修行と魔境の出現、そこからの脱却に焦点が絞られている。

孫悟空が三蔵法師に出会うまでの物語は、『六祖壇経』に出てくる慧能の体験をモデルにしている。孫悟空の冒険は、師匠のもとでの修行を終えた修行者が、自力で修行を続け、次々と生じてくる「魔境」を克服してものがたりであると言える。

三蔵法師は、求道心、菩提心を表し、孫悟空、猪八戒、沙悟浄はそれぞれが瞋・貪・癡を表す。貪・瞋・癡は本来煩惱の三毒を意味するが、『西遊記』では、菩提心が貪・瞋・癡の煩惱を操りながら、そのエネルギーを利用して、修行の過程を先に進めていく構造になっている。

『西遊記』に登場する魔物の興味深い点は、本来天上界に住んでいた動物などが、仏の教えを耳にして、霊力を手にして、地上界に逃れて悪さをするという点である。魔物達は孫悟空らに成敗

されて、もとの姿を暴かれて、天上界に戻ることになる。仏の教えに触れることによって、魔物に変わるのであって、そうでなければ、ただの生き物である。これは、「魔境」の基本的性質を示している。

『西遊記』が興味を引かれる理由は、「魔境」克服の過程が、一般の生活上での心理過程と類似するからであろう。更に言えば、修行の過程は、日常生活での心理過程を凝縮するものでもある。

【考察】

『西遊記』を比較対象とすると、「魔境」は瞑想によって自我の統制が緩み、修行の進展に伴って、霊的なエネルギーを得た心的コンプレックスが、活発に動き出し、不安、歓喜などの感情の変化や知覚の変容をもたらすものと言える。仏法に触れた生き物が魔物に変化することと同じである。魔物が天上界と地上界を行き来するように、「魔境」は境界的であり、両義的である。事例に現れているように、東洋の伝統の修行の過程で、西欧人が「魔」的存在となったのも、その境界性に理由があるだろう。

【結語】

事例二つは『西遊記』に見られるような、求道心と「魔境」と対決する機能とが分離せず、患者一人で両面を担っているため、「魔境」的な状況から完全に脱することができなかった。受診後、10年以上経過観察することができている。それぞれ統合失調症圏の事例と言える。同様のレベルの症状を呈した事例に比較すると、社会適応面で機能が維持されている。自発的に修行を希望したこと、指導者を含め修行の枠を受け入れていたこと、自己努力の必要性を認識していることなど、安定した治療を受け入れる基盤になっていると考えられる。このころからみると、宗教的修行には精神疾患の発症や悪化を防ぐ予防的な意味をもっていると考えられる。

11月3日 午後の部

13時～13時30分

良心館1階 RY104号教室

特別講演「これからのトランスパーソナル心理学に求められるもの」

林信弘先生 立命館大学

林信弘先生 京都大学大学院教育学研究科博士課程修了、立命館大学文学部特任教授、文学博士、現在、京都統合人間学研究会および京都人間学塾を主宰。著書に『超実存的意識』（法律文化社）『意識の人間学』（人文書院）『意識の弁証法』『無の人間学』『いかに生きるか』（晃洋書房）他多数。

JATP 分科会

13時30分開始 良心館1階 RY104号教室

司会進行 村川治彦先生 関西大学

分科会活動は、トランスパーソナル運動の多様な側面を担っておられる本学会会員の活動を紹介し、学会内外での連携をサポートしていくことを目的とします。今回は初めてということもあり、まず全体の集まりで、以下の提案された分科会について、10分ずつ提案者の方々からご説明頂き、その後、個別に集まりをもつようにしたいと考えています。

◇ 巻口勇一郎先生「スピリチュアル・エマージェンシー・クンダリーニ体験」

霊的という概念も何か既に定まった固定的なものではなく、なおおぼろげなものであり、それゆえ霊的な危機というテーマも非常に幅が広い。それは自我の肥大化や臨死体験など様々な内容を含むと考えられる。こうした代表的テーマとともに、インドの思想であるチャクラや、ナディ、クンダリーニ等についても参加者が研究成果を持ち寄ってテーマ設定をして、考察を深めていければ幸いである。クンダリーニとは「何とも把握しがたいもの」であると個人的には思うことがあるが、これについて確かに把握するにはどうすればよいのか、あるいは各自に任せるべき課題なのか。また、テーマを霊的危機と限定した場合、何が霊的なのかを把握するために、肉体的危機、精神的危機についても知っておく必要があるだろうし、それらの無関係性あるいは相互関係というものもあれば検討していく必要があるだろう。こうした問題関心は、霊的感覚と心理学的発達に関連していないように思える事例の理解にもつながっていくのではないだろうか。また危機という問題関心は、放射能や環境破壊問題の発生を通じた現代社会・現代文明・人類の差し迫った課題でもあり、物質的な地球環境の悪化は、おそらく肉体的危機をもたらし、その後は果たして何をもたらすのか？

◇ 松本孚先生 「紛争解決とスピリチュアリティ」

日本語にすると「紛争」、「対立」、「争いごと」、「諍い」、「不和」、「葛藤」、などと訳される「コンフリクト (Conflict)」について、その解決や転換を非暴力的に且つスピリチュアル (トランスパーソナル) に実践する方法を追究していきたいと思っています。コンフリクトの対象は、対人間コンフリクトから国家間コンフリクトまでより広い範囲で検討していきたいと思っています。

◇ 塚崎直樹先生 「禅と心理療法を巡る懇談会」

宗教的な修行を行った人が、心理療法を専門家として実施する場合、どのような態度や心がけで実践しているのか、その実際を交流させたいという目的で、2008年9月から、年に二回京都で開催しています。当初は臨済禅の方が中心でした。資格としては、参禅など修行経験のある方で、臨床心理士または精神科医として臨床に携わっている方。その後、真言宗、浄土真宗、などの方も参加されるようになりました。僧籍をもっておられるかたが多いです。毎回7～8名の参加です。レポーターの実践報告の後自由討論をおこなっています。活発に議論すると言うより、それぞれの経験に耳を傾けて、和やかに話し合うという雰囲気です。今回は、参加者の広がりをもてみようという考えです。

〒603-8179 京都市北区紫竹上梅の木町17-5 つかさき医院

TEL (075)495-2346 FAX (075)495-2356

E-mail bankyu@mbox.kyoto-inet.or.jp

<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/bankyu/>

◇ 石川勇一先生 「靈性に導かれる援助法の探求」

カール・ロジャースは「クライアント・センタード・セラピー」を提唱し、専門家主導の対人援助のあり方に大きな一石を投じました。それから60年余り経った現在、クライアント主導の理念に加えて、クライアントの「どの領域を中心とするか」を明確にする必要があるような気がしています。私は、クライアントの自我や無意識ではなく、より高次の意識である魂や霊を中心にするとう援助がより効果的に動くという心理臨床経験から、これを「スピリット・センタード・セラピー」と名づけてみました。このような、自我や無意識ではなく、靈性に導かれる心理療法や対人援助法について提案させていただき、一緒に考えてみたいと思います。

◇ 永沢哲先生 「死にゆくプロセスとともに生きること

—仏教を土台にしたスピリチュアル・ケアの創造に向けて—

この分科会は、仏教を土台にしたスピリチュアル・ケアを日本で創り出すことを目

的としています。世界に類例を見ない高齢化の道をたどりつつある日本は、死についてどのように考えたらいいか、死にゆく人とどのようにつきあっていったらいいのか、文化の空白状態にあると言えます。

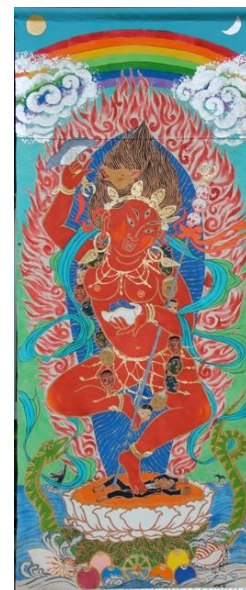
そういう現状を踏まえ、この分科会では、スピリチュアル・ケアの現場とのたえざる対話の中で、ジョアン・ハリファックス師が仏教の瞑想をもとに生み出した「死にゆくプロセスとともに生きる」プログラム、野口整体における看取りの身体技法、ミンデルのコマワーク、東南アジア、中国、チベットの仏教や伝統医学の知恵や技法から学びつつ、日本の風土にふさわしい「仏教を土台にした新しいスピリチュアル・ケアのあり方を作り出す」ことを目指します。

◇ 小田まゆみ先生「Feminine arises:女性性とスピリチュアリティ」

女性の本能は危機を感じると、立ち上がります。70年代ベトナム戦争の終末に、行き詰まった物質文明からの脱皮を求めて、アメリカ、ヨーロッパでは人々が東洋の宗教の道を生活の中に取り入れました。たくさんの女性がウーマンズリブ (women's liberation) から、より人間性の解放を求めてウーマンズ・スピリチュアリティという新しい動きを作り出しました。私はアメリカで30年間禅の修行を通して、彼女達から新しい生き方を学びました。そこで日本の仏教を新鮮な目で見る事ができたことをうれしく思っています。 東北大震災と津波の危機、そして医、食、エネルギーの問題を抱える日本。支配と搾取を原理とする恐怖の文化から、大地と共に生きる和の文化への変容を求められている私たち。一緒に修行をした ジョアン・ハリファックス老師と作家ナタリー・ゴールドバーグさんと共に、私たち日本人の女性性の回復について話をしたいと思っています。

11 月中に同志社大学江湖館で私の個展、
「Feminie arises」の展覧会をしています。

同志社大学大学院総合政策科学研究科
京町家キャンパス「江湖館（こうこかん）」
京都市中京区衣棚通丸太町下る西側
TEL./FAX.(075)212-1207



11月4日 オプショナル・ワークショップ

会場 虚白院 京都市上京区烏丸通上御霊前下ル相国寺門前町 682 番地

会場は大学内ではありません。大学から烏丸通り沿いに、北に徒歩 10 分程度です。

申込みは個別にできますが、午後に参加される方は午前も参加されることをお奨めします。詳細はイーストウエスト対話センターのHP (<http://east-westdialogue.org>) をご参照ください。別途参加費を徴収します。申し込み先、振込先等は大会とは別になりますので、ご注意ください。

1 倍音声明 9時-12時 永沢哲先生

倍音声明は、中央アジアで広がった発声方法です。人間の声には、いくつもの倍音の層があり、その関係が、声の個性を決めています。ところが、そのうち、高い層の倍音に意識を向け、強調することで、まったく天国的な音の体験が生まれます。

今回のワークショップでは、モンゴル、トゥバのホーミー（ホルマー）、チベットの声明をもとに、イギリスのセラピストであるジル・パースが創造した倍音声明を、実修します。この倍音声明は、故吉福伸逸氏によって日本に伝えられたものですが、方法が簡単で、生命エネルギーの集中するチャクラに音を共鳴させ、集団で行う点に特徴があります。身体の内部をマッサージするはたらきがあり、心身の浄化、生命力の活性化に大きな効果があります。

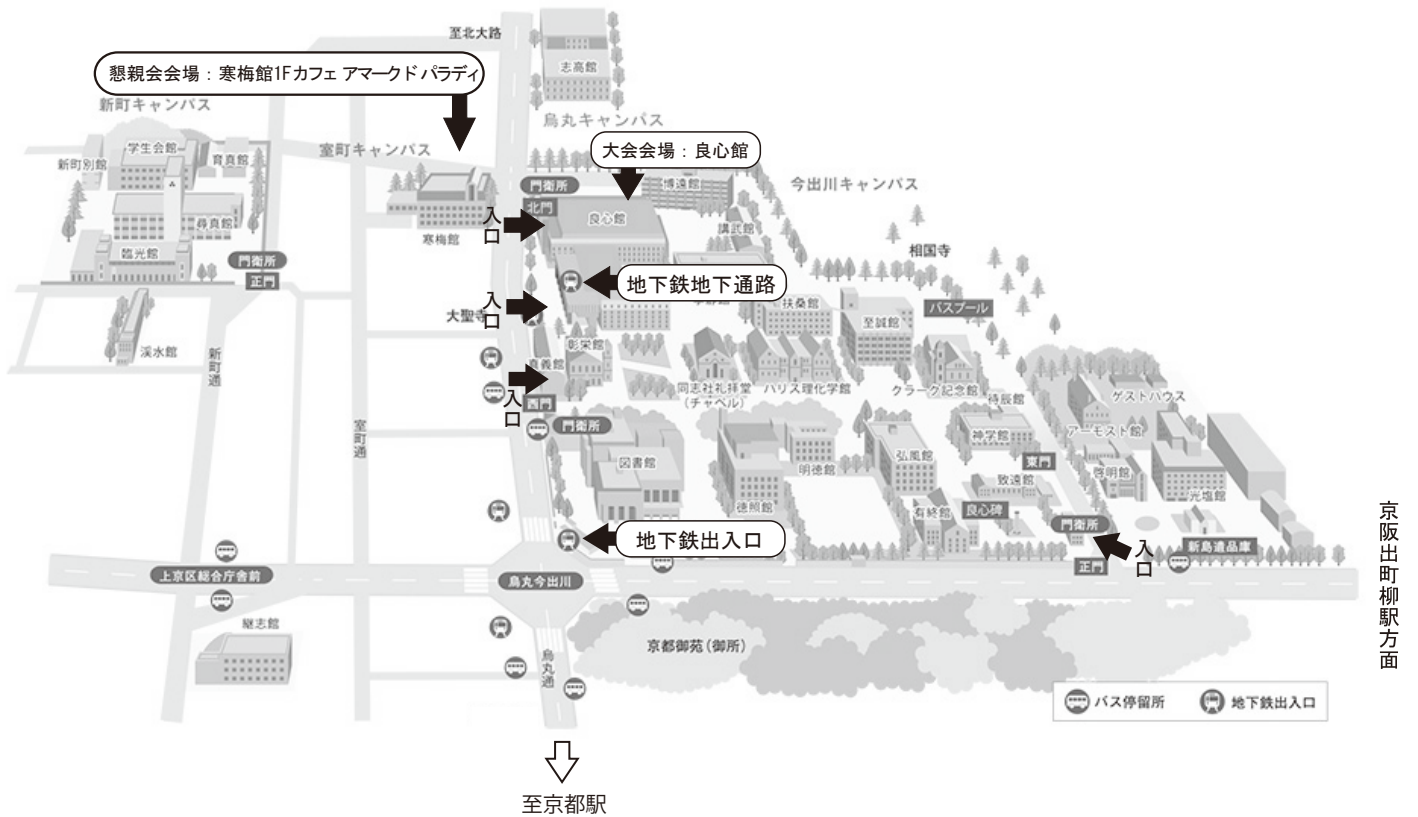
講師：永沢哲 1957 年生まれ。宗教人類学（チベット仏教、身体論、瞑想の脳科学）。東京大学法学部卒。瞑想修行と科学的実験を結びつける作業をおしすすめつつある。現在京大文芸学部准教授。主な著書に『野生のブッダ』（法蔵館）、『野生の哲学』（筑摩文庫）、『瞑想する脳科学』（講談社選書メチエ）など。1980 年代に倍音声明を学び、最近、そのワークショップとともに、科学的研究を行いつつある。

2 女性性とスピリチュアリティ 13時-16時 小田まゆみ先生

1970 年代からアメリカ社会でスピリチュアリティ運動が広がるうえで、それまで男性的な宗教の中に埋もれてきた女性性の回復が大きな役割を果たしました。日本でも各地で様々な女性のスピリチュアリティの実践が始まっており、この機会にそうした人々のネットワーク作りを行いたいと思います。ゲストに、ジョアン・ハリファックス、ナタリー・ゴールドバークらアメリカの女性のスピリチュアリティ運動を担ってきた方々の飛び入り参加も予定しています。

講師：小田まゆみ アーティスト、カリフォルニア統合学大学院名誉博士。東京芸術大学卒。女神をモチーフに女性と自然とのつながりをテーマにした作品を数多く世に出し、現在は京都とハワイを拠点に、いのちを大切にしたい生き方を若い人たちに教えている。東北関東大震災後、若い人々の里帰りを助ける「女神の里」のプロジェクトを設立。著書『ガイアの園』、『女神たち』（現代思潮新社）他

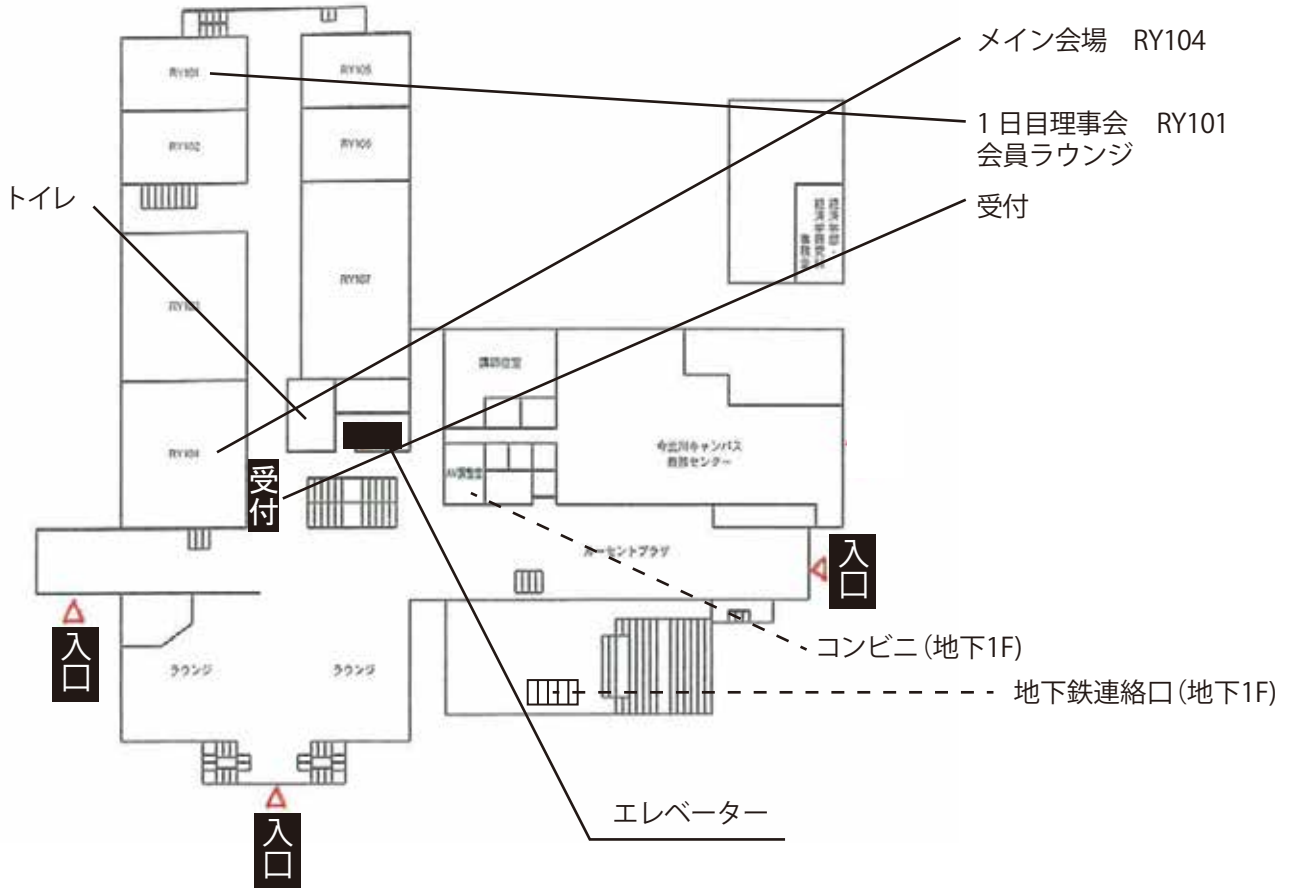
同志社大学キャンパスマップ



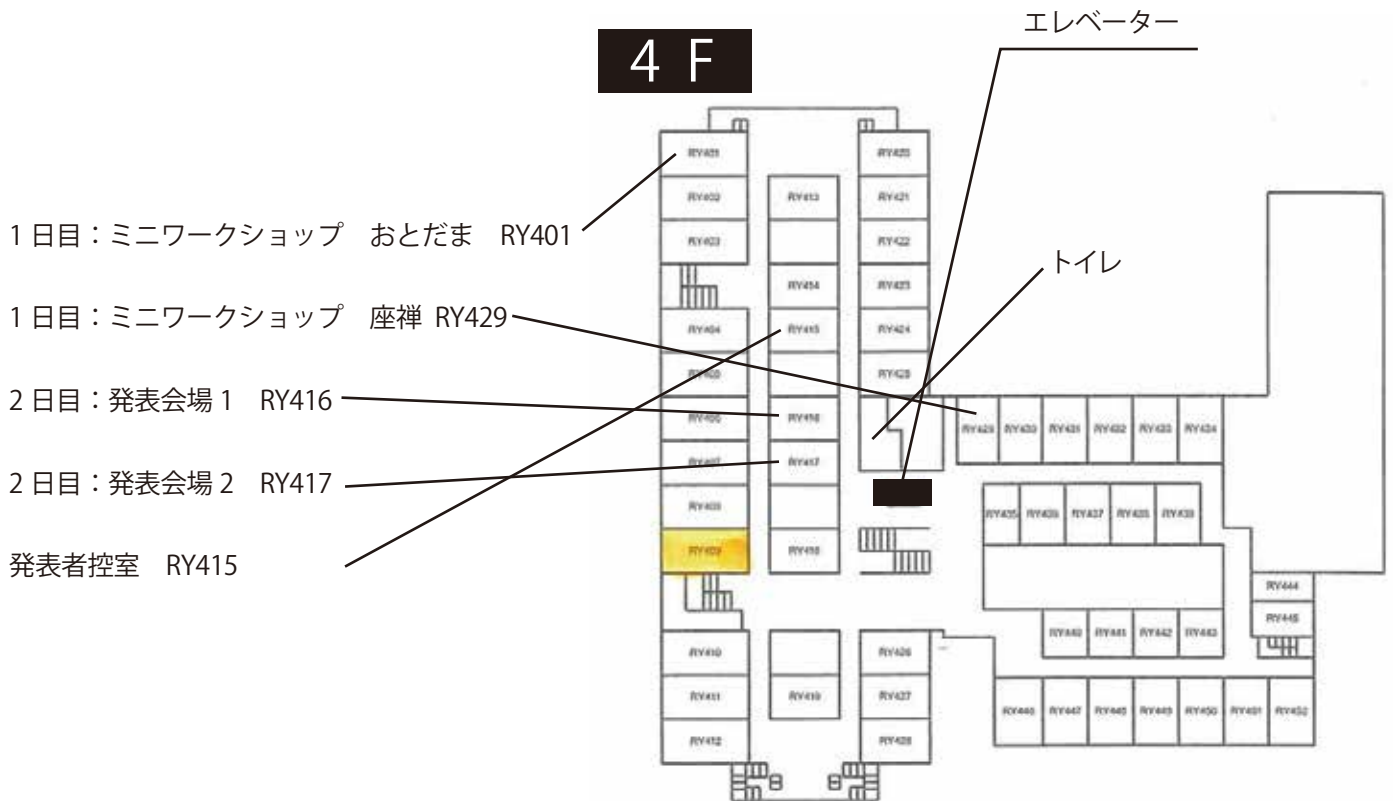
主催 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会
 大会事務局 同志社大学社会学部 中川吉晴研究室
 学術大会専用Eメール jatp2013@gmail.com

良心館 館内図

1 F



4 F



トランスパーソナル心理学、人間性心理学、全体論的心理学、インテグラル心理学、スピリチュアリティおよび瞑想関連分野の研究者、院生レベルの学生、臨床プログラム関係者に広くお薦めいたします。

ワイリー-ブラックウェル社の

トランスパーソナル心理学ハンドブック The Wiley-Blackwell Handbook of Transpersonal Psychology

Edited by **HARRIS FRIEDMAN & GLENN HARTELIUS**

University of Florida, USA; Sofia University's School of Transpersonal Studies, Palo Alto, USA

2013年9月出版 760ページ ハードカバー ¥26,573(学会特価)

- ◇ トランスパーソナル心理学分野の50人以上の専門家が執筆する決定版的ハンドブック。
- ◇ 学問的に確立され、かつ新たに提唱されつつある最新動向を収録。
- ◇ トランスパーソナル心理学の広範で多様な全体像を明らかにしています。
- ◇ シャーマニズム、神経生物学、ホロトピズム、トランスパーソナルな体験の数々をも収録。

【編集者の紹介】

Harris L. Friedman is a former Research Professor of Psychology at the University of Florida, USA, and Emeritus Professor at Saybrook University, USA. A Fellow of the American Psychological Association and past President of the International Transpersonal Association, he continues to practice psychology and is the current Chair of the Transpersonal Psychology Interest Group of the APA's Society for Humanistic Psychology. Professor Friedman has published extensively on transpersonal psychology and is senior editor of the *International Journal of Transpersonal Studies* and associate editor of *The Humanistic Psychologist*.

Glenn Hartelius teaches in the doctoral program at Sofia University's School of Transpersonal Studies, Palo Alto, USA. He is editor of the *International Journal of Transpersonal Studies* and Secretary of the International Transpersonal Association. Dr Hartelius has published work in the fields of transpersonal psychology and consciousness studies, and has taught at the California Institute of Integral Studies as well as at Naropa University in the state of Colorado. He has thirty years' experience in private practice as a somatic counselor and practitioner.

(Wiley) ISBN 9781119967552

ご注文・お問い合わせは下記へお申し込み下さい。

有限会社 **ブックマン**

〒113-0033

東京都文京区本郷3丁目4-8-501

Tel 03-5684-0561

Fax 03-5684-0562

E-Mail: sales@e-bookman.co.jp

(有)ブックマン

中部東海営業所

Tel 052-740-1829

Fax 052-782-4771

chubu@e-bookman.co.jp

広島海外(株)

Tel 082-236-3522

Fax 082-236-3530

books@dear.ne.jp

(有)ブックマン

関西営業所

Tel 0568-65-7228

Fax 0568-65-7988

kansai@e-bookman.co.jp

福岡海外(株)

Tel 092-741-2685

Fax 092-741-8418

fkaigai@lime.ocn.ne.jp